2022 年 9 月

大学コンソーシアム市川参加校におけるオンライン授業についてのIR分析
（共同IR報告書）

1. はじめに

大学コンソーシアム市川は 2018 年 11 月、千葉県市川市に所在する5つの高等教育機関（3大学、2短期大学）が教育資源や機能等の活用を図りながら幅広い分野で相互に連携協力し、教育・研究の質的向上を図り、地域社会の発展に資することを目的として設立されました。また、同時にこの大学コンソーシアム市川と市川市及び市川商工会議所との三者間の包括連携協定を締結し、「大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム」を形成しました。本プラットフォームの特徴は、各高等教育機関のリソースを共同活用し、「ゆとりある子育て環境」「高齢化社会に対応した地域医療・福祉サービス」「現代社会にあった都市型ビジネスの展開」等といった都市型の具体的な地域課題を、実践的な学びの中で解決することにあります。この目的の達成のため、本プラットフォームでは市川市及び市川市の高等教育機関それぞれの現状を分析し、その課題と目的、及び実行のための具体的なプロセスを中期計画としてまとめています。

本中期計画では、地域つながり力を持つ人材育成のため、12の取組目標を設定しています。この取組目標の評価について、2つのアウトカム目標が設定されていますが、その1つとして「プラットフォーム参加大学等の卒業時の平均満足度 3.5 以上」があります。本共同IRは、本コンソーシアム参加校 5 校のうち 4 校（千葉商科大学、和洋女子大学、昭和学院短期大学、東京経営短期大学）が、各高等教育機関の学生生活に関するアンケート結果の分析とその比較を通して、このアウトカム目標達成の一助となることを目的とし、2020 年度より主体的な活動を行っています。

昨今の新型コロナウイルス感染症の影響により、大学教育を取り巻く環境は劇的に変化しました。特に、感染拡大防止のため，ほぼすべての大学は否応なくオンライン授業に取り組むことになりました。しかし今後、新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後もオンライン授業が全くなくなるということは考えにくい状況です。事実、対面授業とオンライン授業を組み合わせたハイブリッド授業も、多くの大学で検討・導入されつつあります。今回の報告書は、学生のオンライン授業の意識調査を通じて、各校が今後オンライン授業をどのように活用していくか、そして大学コンソーシアム市川内でのこれからのオンライン授業の在り方について、示唆を得ることを目的とします。

2020 年度の報告書では、各高等教育機関の学生生活に関するアンケート調査内容を分析し、学習時間、アルバイト、授業及び施設設備等に対する要望といった点に注目して、各校間の比較を行いました。高等教育機関ごとに特徴があり、それぞれの高等教育機関の属している学生の特色や、今後の課題を確認することができたと考えられます。一方、それぞれのアンケートで設問の聞き方や選択肢の差異があり、各高等教育機関単体での傾向を見ていく上では十分であるものの、各高等教育機関を超えて共同で学生満足度を改善していく上では不十分でした。この反省を踏まえ、今回は各校のアンケートに共通の項目を設け、比較・検討ができるよう設計し、実施しています。

2. 調査・分析方法

オンライン授業に対する学生の意識について比較・検討するため、千葉商科大学、和洋女子大学、昭和学院短期大学、東京経営短期大学が定期的に実施している学生アンケート調査に、オンライン授業に関する意識調査の質問項目等を追加し、その結果を分析しました。なお、本分析の回答者数、実施方法は以下のとおりです。

	千葉商科大学	和洋女子大学	昭和学院短期大学	東京経営短期大学	合計
回答者数	4,862	1,235	312	233	6,642
実施方法	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン・紙	-

3. 分析結果

(1) オンライン授業に関するアンケート結果(大学ごと)

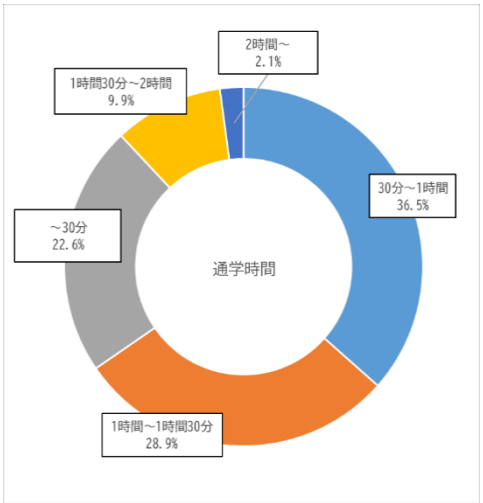
学生の状況を知るためには、学生の学習状況を把握することが不可欠であると考えられます。この観点について各高等教育機関の結果を分析し傾向を比較します。

① 千葉商科大学

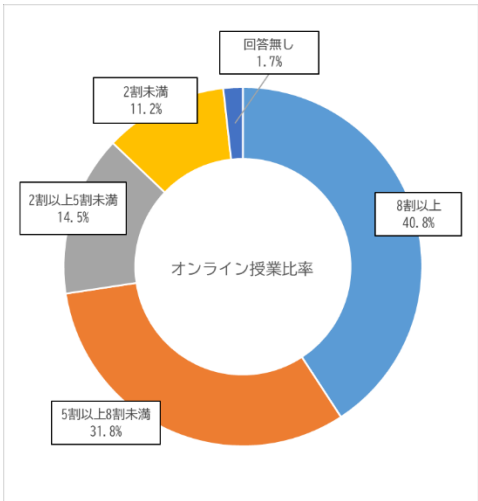
千葉商科大学では、全学部生に毎年「学生生活実態調査」として、学生の生活実態を把握し、大学生活全般の向上を図ることを目的として実施しています。実施方法は、学内ポータルサイトを使用したオンラインにて行い、学習時間、施設設備、アルバイト、大学の満足度等、幅広い質問項目から構成されています。2021 年度の回答者数は 4,862 名でした。

まず、回答者の通学時間についてまとめると、「30 分～1 時間」が 36.5%、「1時間～1時間30分」が 28.9%、「～30 分」が 22.6%、「1 時間 30 分～2 時間」「2 時間～」が計 12.0%となり、6割弱の学生が1時間未満、9割弱の学生が1時間半未満の通学時間であると回答しました(図①-1)。

また、回答者のオンライン授業の比率(2021 年度春学期)は、「8 割以上」が 40.8%、「5 割以上 8 割未満」が 31.8%、「2 割以上 5 割未満」が 14.5%、「2 割未満」が 11.2%となり、7 割以上の学生が履修科目の半分以上をオンラインで受講しているという結果となりました(図①-2)。

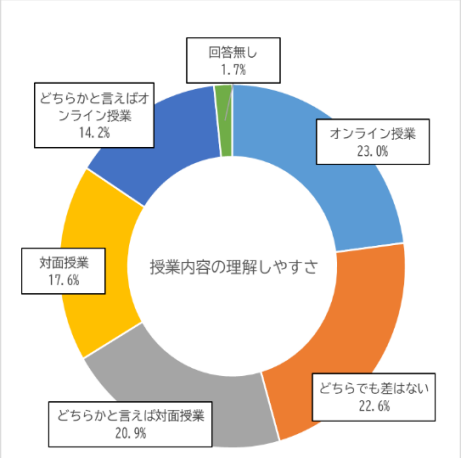


図①-1:通学時間



図①-2:オンライン授業比率

また、オンライン授業と対面授業のどちらの方が、授業内容が理解しやすいかという質問については、「オンライン授業」が23.0%、「どちらかと言えばオンライン授業」が全体の 14.2%、「どちらでも差がない」が 22.6%、「どちらかと言えば対面授業」が 20.9%、「対面授業」が 17.6%となりました（図①-3）。「オンライン授業」「どちらかと言えばオンライン授業」を合わせて37.2%、「対面授業」「どちらかと言えば対面授業」を合わせて38.5%と、オンライン、対面がほぼ同割合となりました。

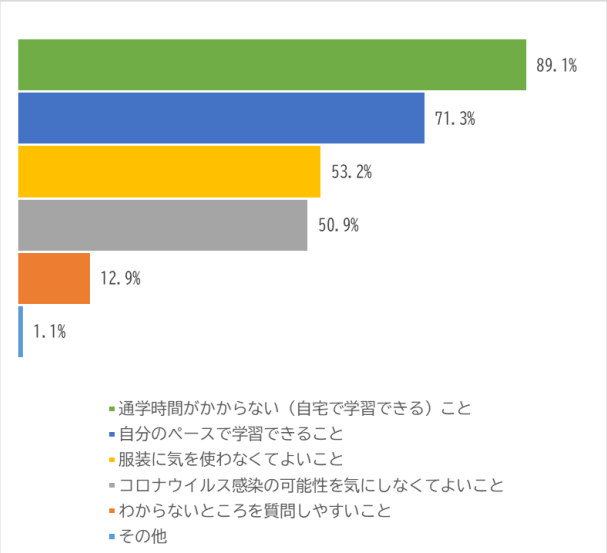


図①-3：授業内容の理解しやすさ

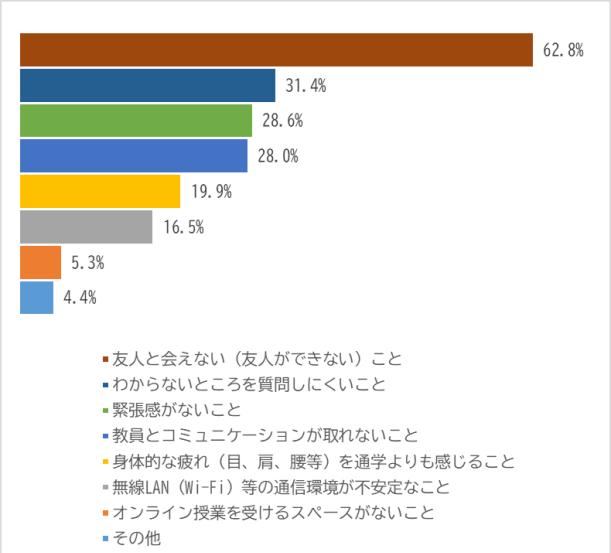
次にオンライン授業を受けて良かった点（複数回答可）については、89.1%が「通学時間がかからない（自宅で学習できる）こと」、71.3%が「自分のペースで学習できること」と回答しました。また、「服装に気を使わなくてよいこと」「コロナウイルス感染の可能性を気にしなくてよいこと」と回答した学生も全体の 5 割以上の回答がありました。移動時間がなくなることや、受講の気軽さという点で好意的な回答が多くなっています（図①-4）。

一方、オンライン授業の困った点（複数回答可）については、「友人と会えない（友人ができない）こと」が62.8%と一番多く、「わからないところを質問しにくいこと」「緊張感がないこと」「教員とコミュニケーションが取れないこと」と続きます（図①-5）。直接友人と会えない点が、学生の中では大きくなっています。

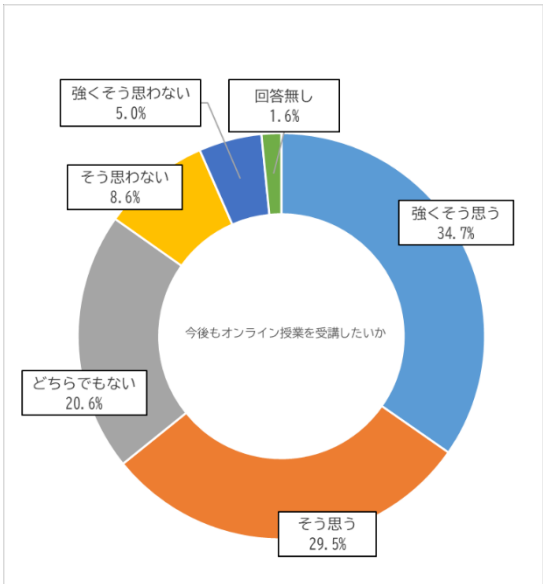
そして、「今後もオンライン授業を受講したいか」については（図①-6）、「強くそう思う」が 34.7%、「そう思う」が 29.5%、とオンライン授業も今後も受けたいという学生が全体の約 64%となり、「そう思わない」「強くそう思わない」合計の約 14%と比較し、大きく上回りました。



図①-4：オンライン授業を受けてよかった点



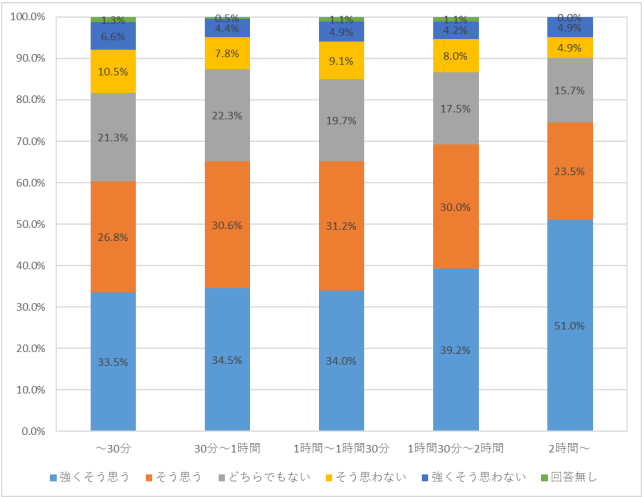
図①-5：オンライン授業の困った点



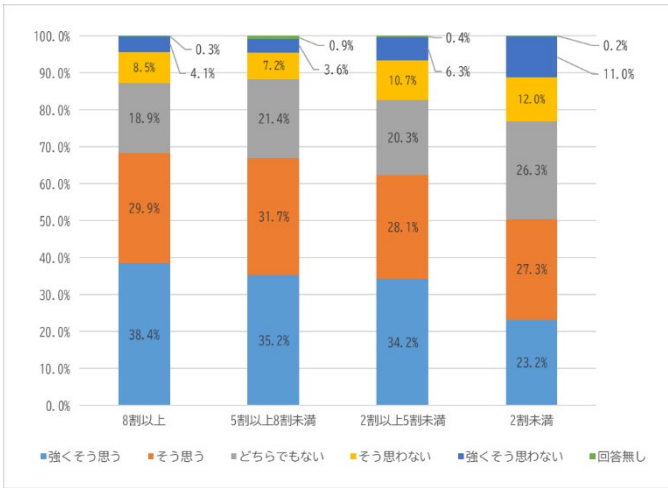
図①-6：今後もオンライン授業を受講したいか

次に今後のオンライン授業の受講可能性について調べるため、「今後もオンライン授業を受講したいか」と「通学時間」「オンライン授業の比率」について、クロス集計を行いました。

「今後もオンライン授業を受講したいか」と「通学時間」についてクロス集計を行った結果（図①-7）、通学時間が長くなるほど今後もオンライン授業を希望する学生の割合が大きくなり、通学時間が 1 時間30分を超えると、約7割以上の学生が今後もオンライン授業を受講すること希望しています。また、「今後もオンライン授業を受講したいか」と「オンライン授業の比率」についてクロス集計を行いました（図①-8）。結果、「強くそう思う」「そう思う」の合計について、オンライン授業比率が「8割以上」の学生が 68.3%、「5 割以上 8 割未満」が 66.9%、「2 割以上 5 割未満」が 62.3%、「2 割未満」が 50.5%となり、履修しているオンライン授業の比率が高いほど、今後もオンライン授業を受講したいという学生が多くなりました。



図①-7：オンライン授業の比率 × 通学時間



図①-8：オンライン授業の比率 × 受講したいか

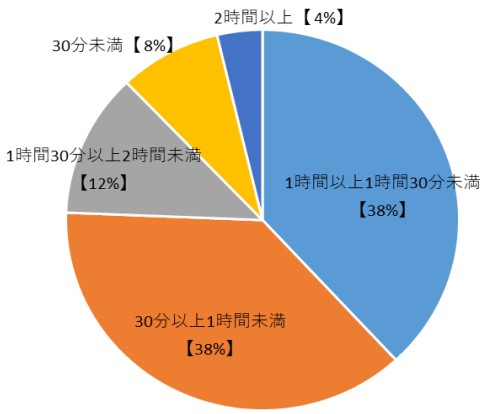
千葉商科大学は 2021 年度春学期、新型コロナウイルス感染症により、オンライン授業の比率が高い学生が多くなっています。友人と会えないというデメリットは感じているものの、通学時間がかからず、周囲に気を遣わずに自分のペースで学習できる点は比較的好意的に受け止められており、通学時間が長い学生ほど、そしてオンライン授業の割合が多い学生ほど今後のオンライン授業に対して前向きな意識があることが明らかになりま

した。今後、新型コロナウイルス感染症が落ち着いたあとも、オンライン授業はなくならず、より効果的な大学教育の実現のため活用していくことが重要であると考えられます。オンライン・対面それぞれの利点を活かしながら、教育方法、教育環境等の改善を進めていきます。

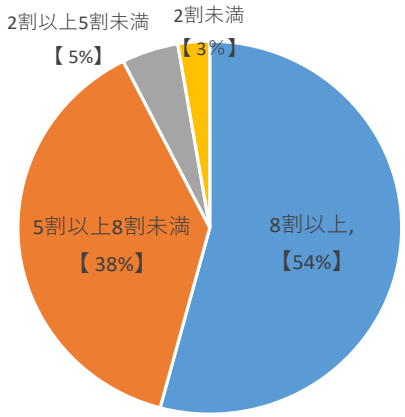
② 和洋女子大学

和洋女子大学では、2 年に一度「学生生活アンケート」として、大学の教育や学生生活に関連するさまざまな問題について、学生がどのように感じているのかを明らかにし、今後の大学改革にその意向を活かしていくことを目的に、学習目標、施設設備、卒業後の進路予定、IT 環境に関する質問、大学の満足度等幅広い質問項目でアンケート調査を行っています。今回のオンライン授業に関するアンケートは別途実施し、1,235 名の有効回答を得ています。

本学の通学者の傾向は、1時間30分圏内の者が 8 割を占めています（図②-1）。また、オンライン授業の比率（2021 年度前期）として、約 9 割の学生が履修科目の半分以上をオンラインで受講しているという結果となりました（図②-2）。

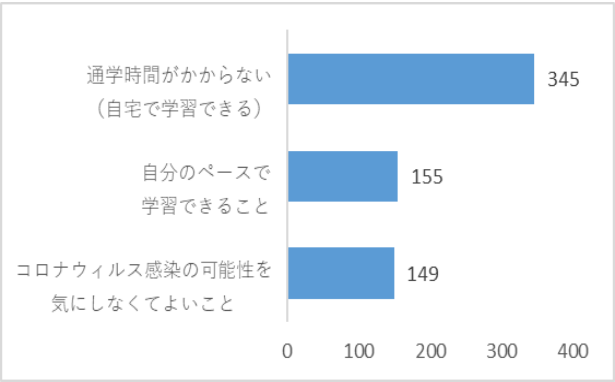


図②-1 大学までの通学時間（片道）

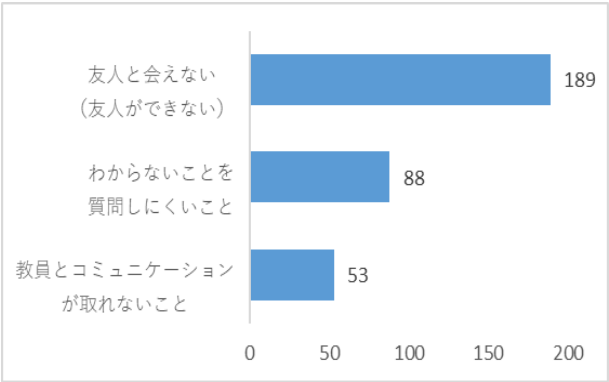


図②-2 2021年度履修したオンライン授業の割合（前期）

次に、オンライン授業を受けてよかった点（複数回答可）については、「通学時間がかからない（自宅で学習できる）」、「自分のペースで学習できること」、「コロナウイルス感染の可能性を気にしなくてよいこと」等が回答として多くあがっていました（図②-3）。また、オンライン授業を受けて困った点として、「友人と会えない（友人ができない）」、「わからないことを質問しにくい」、「教員とコミュニケーションが取れない」の回答が多いことが明らかとなりました（図②-4）。

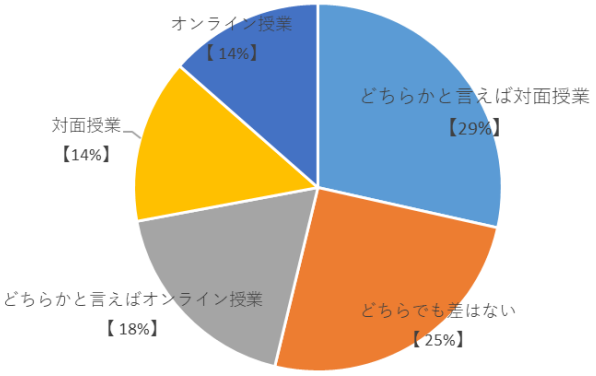


図②-3 オンライン授業を受けてよかった点（複数回答可,上位3項目）

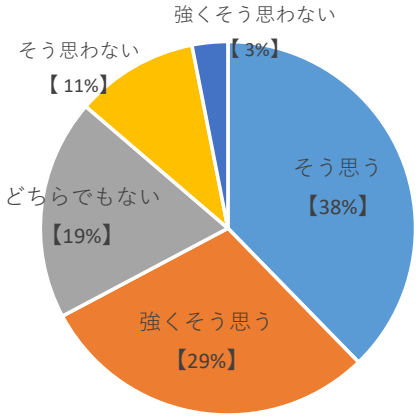


図②-4 オンライン授業を受けて困った点（複数回答可,上位3項目）

「授業内容が理解しやすいと思うのは、オンライン授業と対面授業のどちらですか？」という質問に対して、「対面授業」14%、「オンライン授業」14%となり、対面授業とオンライン授業が同じ割合となりました（図②-5）。また、「新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後もオンライン授業を受講したいですか？」という質問には、「そう思う」38%と「強くそう思う」29%を合わせると7割近くの学生がオンライン授業についても希望しており、対面授業とオンライン授業との併用を希望していることがわかりました（図②-6）。これらの傾向は、新型コロナウイルス感染症の影響による遠隔授業が導入されて２年目ということもあり、少なからず学生や大学側にとっても遠隔授業が浸透していることが背景にあると思います。



図②-5授業内容が理解しやすいのはオンライン授業と対面授業のどちらですか



図②-6 新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後もオンライン授業を受講したいですか

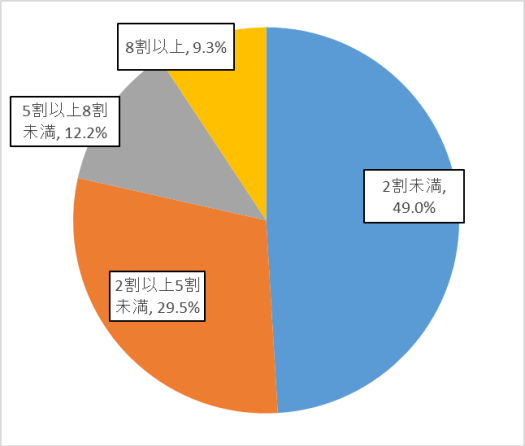
これらの調査結果により、遠隔授業よるメリット、デメリットが具体的になりました。遠隔授業に使用するツールによっては、アンケートを取ったり、板書した内容や画面共有をしたりできるなど、さまざまな機能が搭載されています。時間や場所にとらわれずに受講できることや、通学や移動の負担軽減、感染リスクの不安軽減がされる一方で、友人と話しにくい、教員に質問しにくいなどの意見が多いことや、対面授業の必要性が高い実習・実験等の学びに対する遠隔授業の課題も存在します。

今後、ICT 技術の進展は一般社会のみならず、大学教育の在り方にも大きな影響を与えていくことが予想されており、新たな大学間の教育格差が生じる一因になるともいわれています。教育格差が生じないように一定の学習効果を担保するための支援や仕組みづくりが急務となる中で、本学においても対面授業をベースにしつつ、新たな教育的効果の可能性を秘めている遠隔授業をどのように組み込んでいけるかを模索していくことは、新たな大学改革や学生支援の大切な視点になっていくのではないかと思います。

③ 昭和学院短期大学

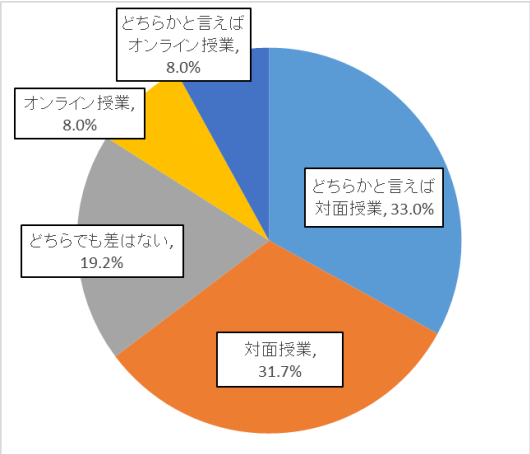
昭和学院短期大学では、毎年「短期大学生調査」として、短期大学の強みや弱みを把握し、教育の充実を図ることを目的に、学生生活に関連する幅広い質問項目でアンケート調査を行っています。今回のオンライン授業に関するアンケートは、短期大学生調査と別に実施しましたが、361 名中、312 名の回答がありました。

「2021 年度春学期に履修した科目のオンライン授業の割合」では、「2割未満」が 49.0%、「2割以上 5割未満」が 29.5%という結果となり、約 8 割の学生が履修科目の内、半分未満をオンラインで受講したと回答しました（図③-1）。



図③-1：オンライン授業比率

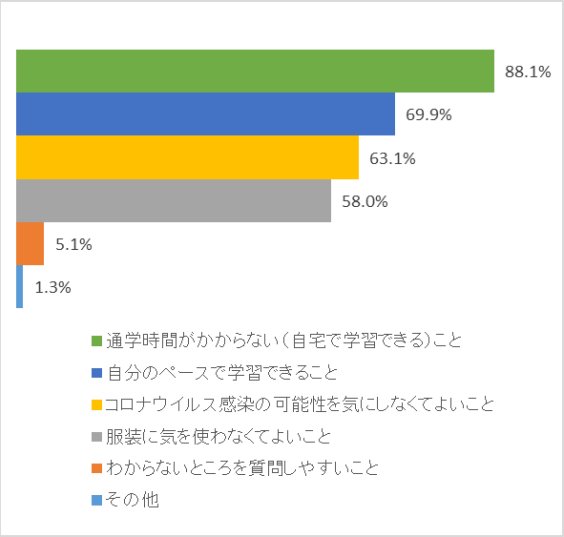
「オンライン授業と対面授業ではどちらが理解しやすいと思いますか。」の質問では、「対面授業」、「どちらかと言えば対面授業」の回答が合わせて 64.7%、「どちらでも差はない」が 19.2%、「オンライン授業」、「どちらかと言えばオンライン授業」の回答が合わせて 16%という結果となり、対面授業がオンライン授業を大きく上回りました（図③-2）。



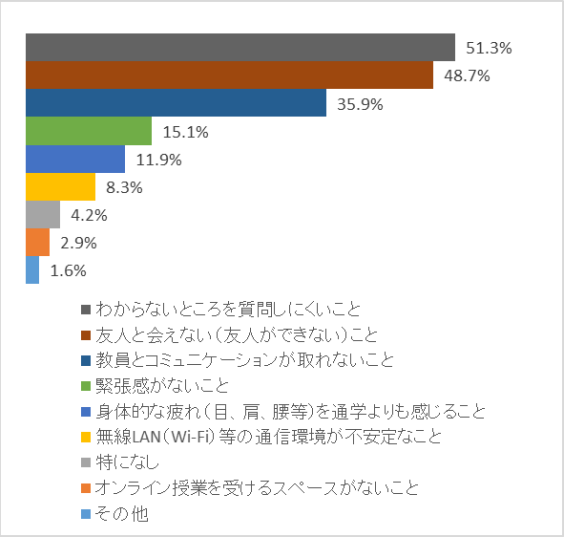
図③-2：授業内容の理解のしやすさ

「オンライン授業を受けていて、よかった点（複数回答可）」の質問では、「通学時間がかからない（自宅で学習できる）こと」が 88.1%と最も多く、続いて「自分のペースで学習できること」が 69.9%、「コロナウイルス感染の可能性を気にしなくてよいこと」「服装に気を使わなくてよいこと」と回答した学生は全体の約6割を占めています。その一方で、「わからないところを質問しやすいこと」と回答した学生は最も少なく、5.1%という結果でした（図③-3）。

これに対して、「オンライン授業を受けていて、困った点（複数回答可）」の質問では、「わからないところを質問しにくいこと」が 51.3%、「友人と会えない（友人ができない）こと」が 48.7%、「教員とコミュニケーションが取れないこと」が 35.9%という結果でした（図③-4）。



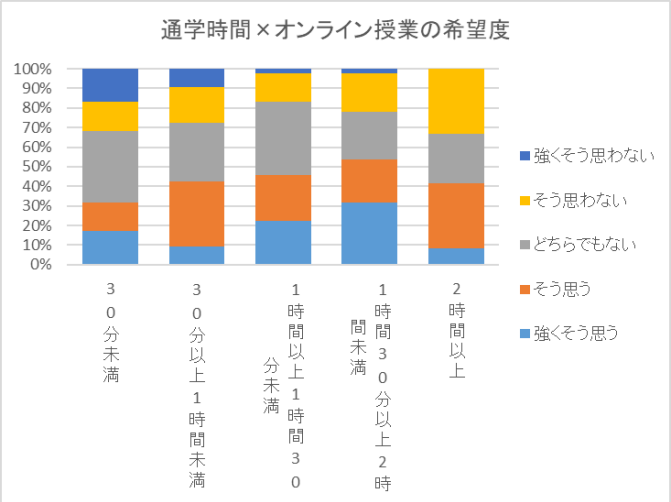
図③-3：オンライン授業を受けていて、よかった点



図③-4：オンライン授業を受けていて、困った点

本学では、オンライン授業の内オンデマンド方式を使った授業が多く、わからないことがあれば授業別のチャット欄やメールを活用する等、質問できる環境を整えていましたが、質問しにくいと感じる学生が多かったことが分かりました。

「新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後も、オンライン授業を受講したいと思いますか。」の質問では、「強くそう思う」、「そう思う」が合わせて 43.6%、「そう思わない」、「強くそう思わない」が合わせて 23.4%という結果でした。これを「通学時間」の回答とクロス集計したところ、「2 時間以上」の属性を除き、「30 分未満」から「1 時間 30 分以上 2 時間未満」と通学時間が長くなるにつれて、オンライン授業を希望する学生の割合が増えていることが分かりました（図③-5）。オンライン授業のよかった点においても、88%の学生が「通学時間がかからないこと」を選んでいることから、新型コロナウイルス感染症の影響下において通学に時間がかかることは学生の負担になっていると考えられます。



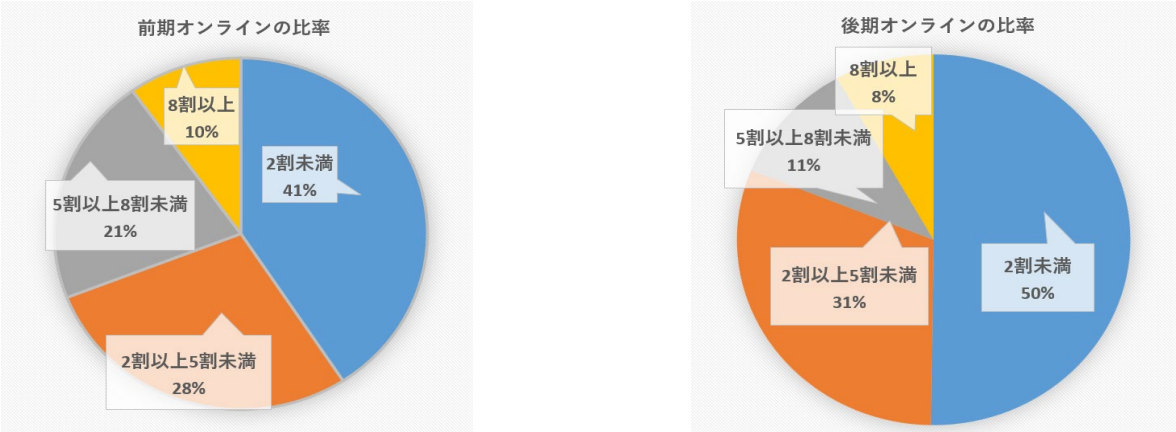
図③-5：通学時間×オンライン授業の希望度

今回のアンケート結果から、本学では対面授業を主軸としつつも、今後授業をより充実させるためには、教員・学生ともに ICT スキルの向上が必要であると考えています。

④ 東京経営短期大学

東京経営短期大学では、毎年前期・後期の授業期間中に「授業評価アンケート」とは別に「学修等に関するアンケート」と題して、日常の学修における意識調査を行っています。学生一人一人の全体的な学修時間、授業の予習復習時間や、資格取得対策時間等の側面と学修時間以外の生活時間の側面とを交えて短大生活での満足度における実態調査です。今般、2021 年度後期には、「学修等に関するアンケート」の実施と同時期に「コロナ禍におけるオンライン授業に対するアンケート」を本学の経営総合学科、こども教育学科の在学生に対して実施し、233 名の有効回答を得ることができました。調査方法は、Web フォーム入力と一部紙による記入方法を併用しました。調査期間は、2022/1/14～2022/1/15 の 2 日間です。

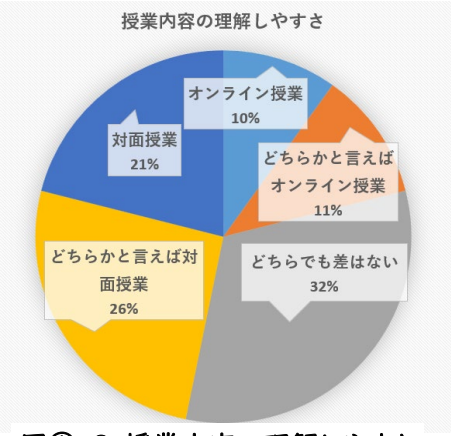
2021 年度の授業開講は、新型コロナウイルス感染症の影響下にあっても三密を避けて感染対策を徹底することで、可能な限り対面授業を推奨しています。一部、同時中継型として対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド授業も実施していますが、15回全てをオンライン開講は有りません。そのため、「履修した科目のオンライン授業の割合」は、「5割以上がオンライン授業だった」が前期3割、後期2割で、逆に7割以上の学生が対面授業を多く受講していることになります（図④-1）。



図④-1 オンライン授業の比率

このような特徴の中、「授業内容の理解しやすさ」によれば「対面授業」「どちらかと言えば対面授業」が合わせて5割に迫り、「オンライン授業」「どちらかと言えばオンライン授業」は2割程度の結果になりました。教員や学生同士の距離が近い環境による授業が理解度に影響していることが伺えます(図④-2)。

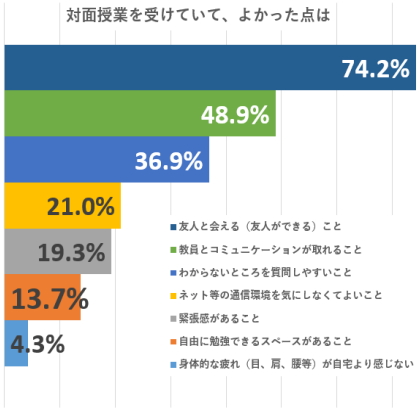
さらに、「どちらでも差はない」が3割以上あることからハイブリッド授業によって対面とオンラインとを日替わりで交互に受講形態を切り替えることで理解度のばらつきが抑えられていると考えられます。



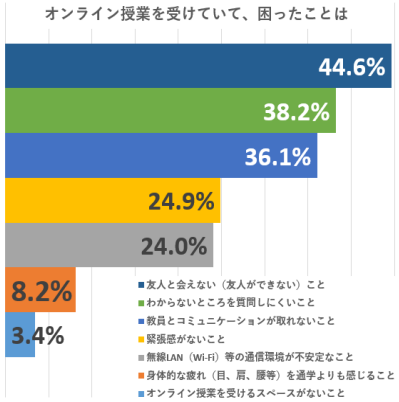
図④-2 授業内容の理解しやすさ

多くの学生がキャンパスに登校して対面授業を受講するといった本学の特徴が確認できます。

さらに、「対面授業を受けていて良かった点（複数選択）」では、「友人と会える（友人ができる）こと:74.2%」「教員とコミュニケーションが取れること:48.9%」「わからないところを質問しやすいこと:36.9%」といった回答が上位を占めていることから、友人や教員と直に話して相談するといった本来のキャンパスライフの重要性を裏付けることができました（図④-3）。



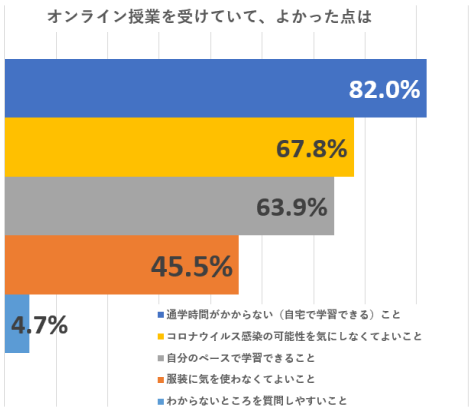
図④-3 対面授業を受けていて良かった点



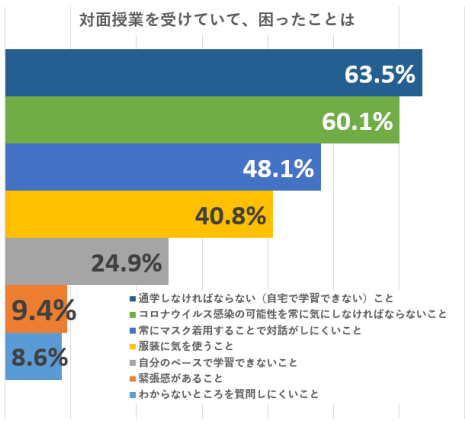
図④-4 オンライン授業を受けていて困った点

逆に「オンライン授業を受けていて困ったこと（複数選択）」では、「友人と会えない（友人ができない）こと:44.6%」「わからないところを質問しにくいこと:38.2%」「教員とコミュニケーションが取れないこと:36.1%」それぞれ3割以上を占め、オンラインによる人との距離の隔たりで友人づくりや人間関係構築が難しくなり授業の理解度に影響を及ぼしているとも伺えます（図④-4）。

一方で、「オンライン授業を受けていて良かった点（複数選択）」では、「通学時間がかからない（自宅で学習できる）こと:82.0%」「コロナウイルス感染の可能性を気にしなくてよいこと:67.8%」「自分のペースで学習できること:63.9%」といった回答が上位を占め、コロナ禍の行動変容で時間の有効活用に意識が高まったと捉えることができます。（図④-5）。



図④-5 オンライン授業を受けていて良かった点



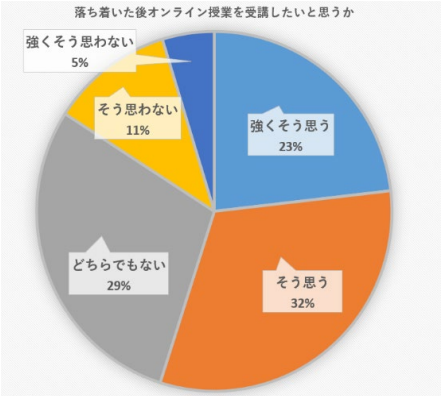
図④-6 対面授業を受けていて困ったこと

逆に「対面授業を受けていて困ったこと（複数選択）」では、「通学しなければならない（自宅で学習できない）こと:63.5%」「コロナウイルス感染の可能性を気にしなければならないこと:60.1%」「常にマスク着用することで対話がしにくいこと:48.1%」であることからコロナ禍の中で外出を強いられることへの不安感が伺えます（図④-6）。

本学の学生は8割近くが通学時間1時間30分圏内です。授業形態の違いからは、通学に費やす時間を合理的に活用することや新型コロナウイルス感染への不安回避がオンライン授業の良い点として捉えることができます。特に、学生自身による時間の使い方に意識が高ぶっていることは歓迎すべきことであります。また、外出行動の有無から「服装」に関する回答も一定数あり、お洒落を気にするキャンパスエイジの葛藤の一面も見えました。

今後の動きとして「落ち着いた後オンライン授業を受講したいと思うか」では、「強くそう思う」「そう思う」を合わせて5割強、「そう思わない」「強くそう思わない」を合わせて2割弱、「どちらでもない」が3割になっています。

今後のニューノーマルな学習環境においてオンライン授業への期待が高ぶっている傾向が伺えますが、一方で「どちらでもない」と「そう思わない」「強くそう思わない」を合わせると約5割近くあることも見逃せません（図④-7）。

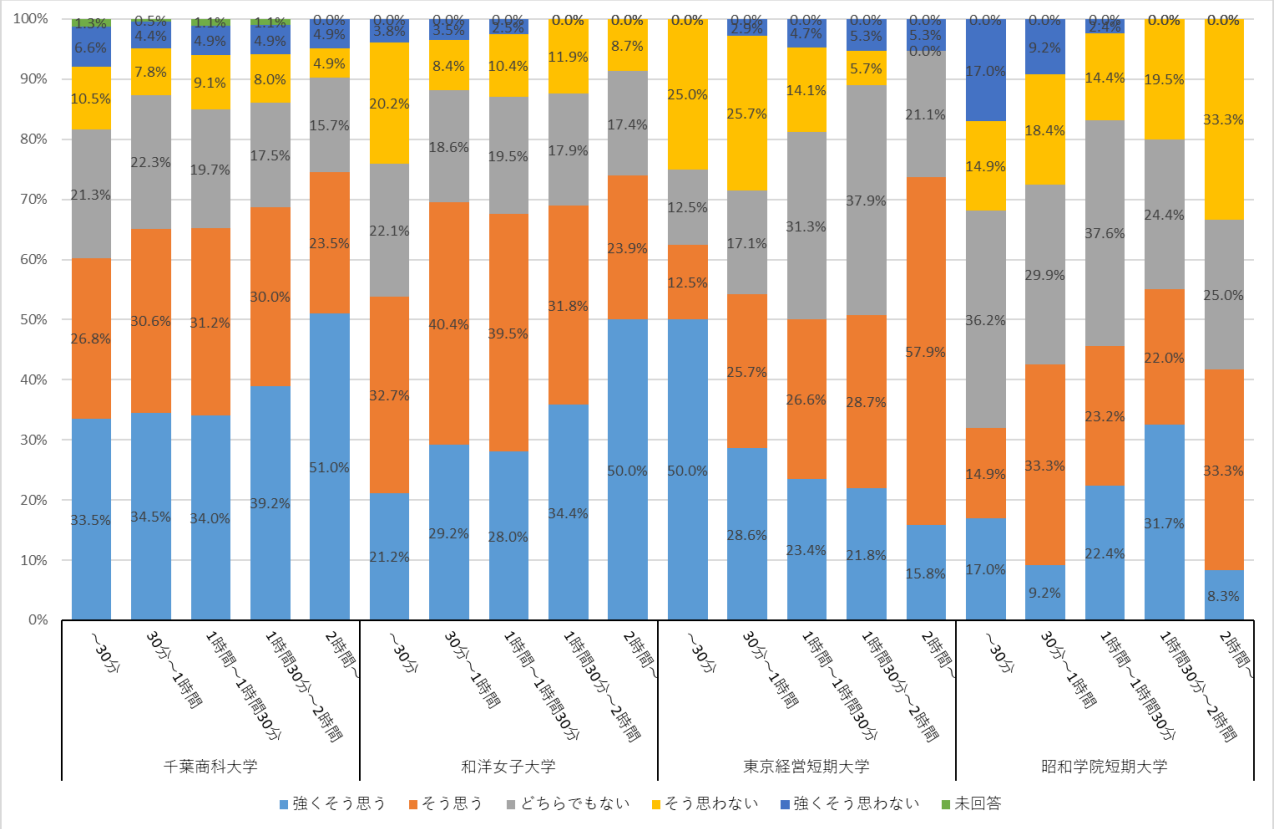


図④-7 落ち着いた後オンライン授業を受講したいと思うか

これらの結果から東京経営短期大学では、ニューノーマルな学習環境においても対面とオンラインを組み合わせた特徴を踏まえた授業開講を推奨し、学生による「限られた時間を合理的に活用する」という意識の高ぶりを歓迎しつつ学生同士や教員とのコミュニケーション形成を強めるためにも可能な限り対面を取り入れた授業スタイルの提供、学生にとって充実したキャンパスライフや人間関係の構築に向けた取り組みが今後の授業展開の課題であることが確認できました。

（3）オンライン授業に関するアンケート横断分析

「新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後も、オンライン授業を受講したいと思うか」の設問に対して、「通学時間」、「2021年度春学期のオンライン授業の履修比率」、「授業方式の理解し易さ」の三つの設問とでクロス集計を行い、各高等教育機関を比較しました。

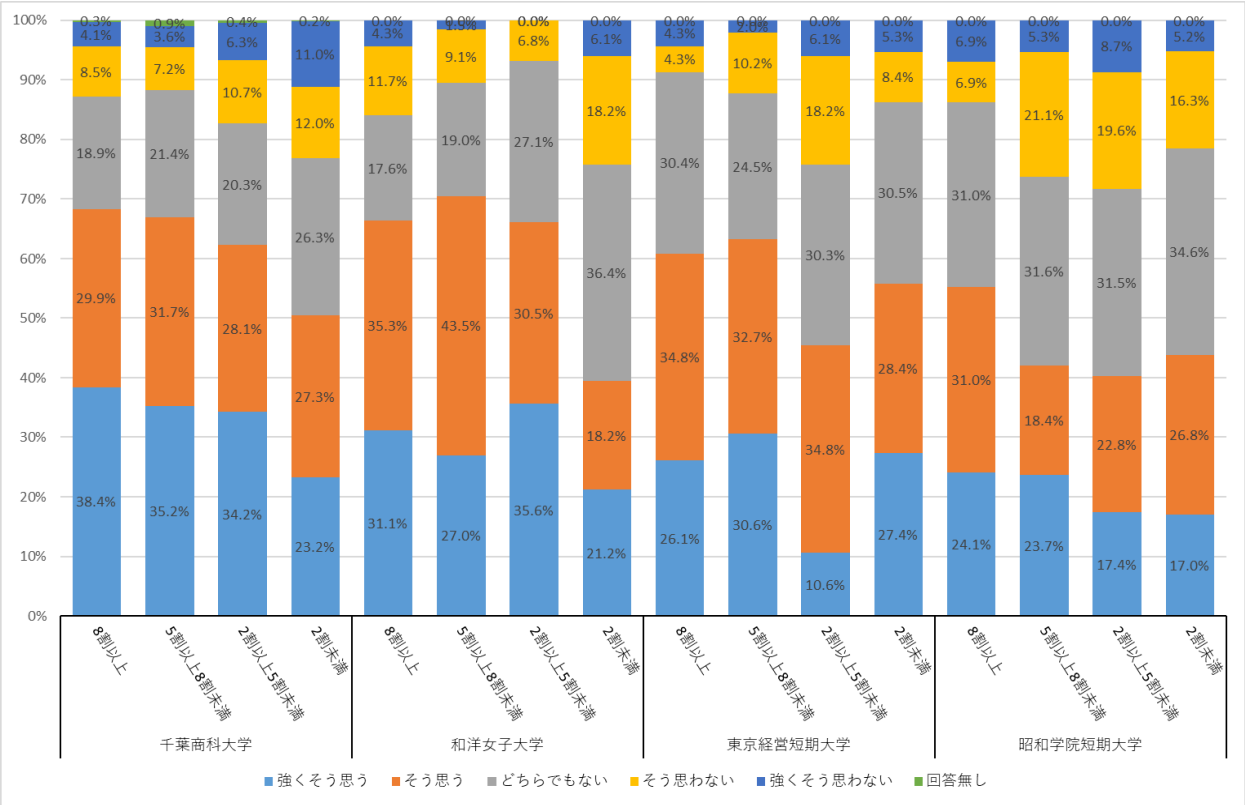


図⑤-1：各高等教育機関における「通学時間」と「新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後も、オンライン授業を受講したいと思うか」の割合

まず通学時間について（図⑤-1）は、「30分未満」、「30分以上、1時間未満」、「1時間以上、1時間30分未満」、「1時間30分以上、2時間未満」、「2時間以上」の5つの属性に学生を分けています。

千葉商科大学、和洋女子大学、東京経営短期大学では、いずれの属性においても今後のオンライン授業の受講希望に対して「強くそう思う」「そう思う」の回答割合が50%を上回りました。しかし、千葉商科大学と和洋女子大学では通学時間が長くなるにつれ「強くそう思う」「そう思う」の回答割合が高まっている一方で、東京経営短期大学では、通学時間が「30分未満」から「1時間以上、1時間30分未満」と長くなるにつれ、「強くそう思う」「そう思う」の回答割合が下がっていることがわかりました。

また昭和学院短期大学については、通学時間が「30分未満」から「1時間30分以上、2時間未満」と長くなるにつれて「強くそう思う」「そう思う」の割合が増えていることが確認できますが、「2時間以上」の属性では「強くそう思う」「そう思う」の割合が下がっています。通学時間が「1時間30分以上、2時間未満」の属性でのみ、「強くそう思う」「そう思う」の回答割合が50%を上回っており、その他の属性では50%を下回っていることが確認できました。



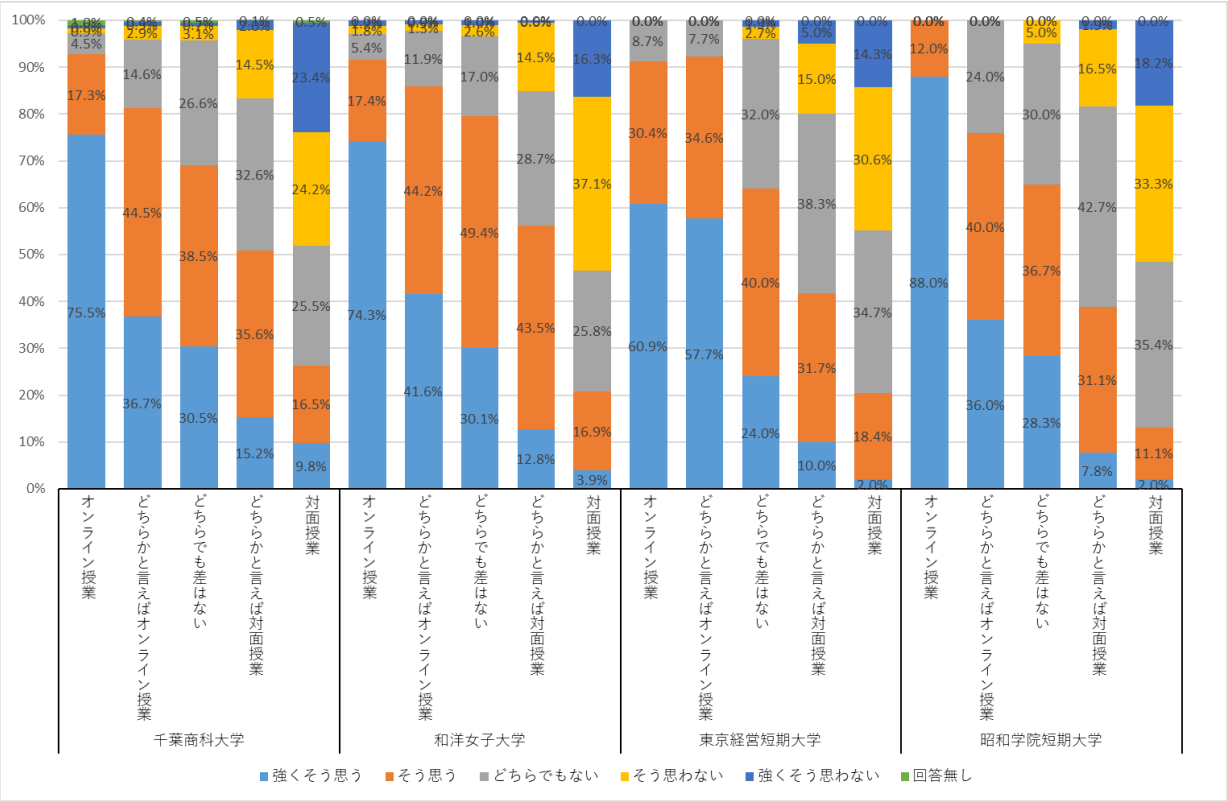
図⑤-2：各高等教育機関における「2021年度春学期のオンライン授業の履修比率」と「新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後も、オンライン授業を受講したいと思うか」の割合

次に2021年度春学期のオンライン授業割合について（図⑤-2）は、学生の履修科目に占めるオンライン授業の割合が「8割以上」、「5割以上、8割未満」、「2割以上5割未満」、「2割未満」の4つの属性で学生を分けています。

千葉商科大学及び和洋女子大学では、概ねオンライン授業の割合が下がるにつれ、今後のオンライン授業の受講希望に対して「強くそう思う」「そう思う」も下がっていることが確認できます。

一方で、東京経営短期大学では、「2割以上5割未満」の属性でのみオンライン授業を希望する割合が5割を下回りましたが、その他の属性では5割以上が今後もオンライン授業を希望していることがわかりました。

昭和学院短期大学では、オンライン授業の割合が「8割以上」から「2割以上5割未満」に下がるにつれて、今後のオンライン授業の受講希望に対して「強くそう思う」「そう思う」も下がっていることが確認できますが、「2割未満」の属性ではオンライン授業の受講希望の割合が微増していることが確認できます。



図⑤-3：各高等教育機関における「授業方式の理解し易さ」と「新型コロナウイルス感染症が落ち着いた後も、オンライン授業を受講したいと思うか」の割合

次に授業方式の理解し易さについて（図⑤-3）は、「オンライン授業」、「どちらかと言えばオンライン授業」、「どちらでも差はない」、「どちらかと言えば対面授業」、「対面授業」の5つの属性で学生を分けています。

いずれの大学も、「どちらかと言えば対面授業」、「対面授業」の属性で、今後のオンライン授業の受講希望に対して「強くそう思う」「そう思う」の割合が下がっていることが確認できます。一方で、いずれの大学においても、授業方式による理解のし易さに「差はない」と回答した属性でオンライン授業を「強くそう思う」「そう思う」の割合が 50%を超えていることが確認できました。

各高等教育機関で共通して、「授業方式の理解し易さ」が学生のオンライン授業の希望する度合いに影響していることが伺えます。また、オンライン授業、対面授業とで理解し易さに差がない場合、学生はオンライン授業による別の指標を評価した上で、今後のオンライン授業を希望している可能性があります。この別の指標は、各高等教育機関の定性分析からも「通学時間」などの時間を有効活用する志向に基づいていることが伺えました。一方で、「通学時間」とのクロス集計に関する比較からもわかる通り、今後、経年データを比較するとともに各大学の定性分析についても比較することで、オンライン授業の受講希望が何に起因するものかを明らかにできると考えられます。

4. まとめと今後の課題

新型コロナウイルス感染症への対応から始まったオンライン授業ですが、各高等教育機関の間では濃淡はあるものの、通学時間が長いほど、オンライン授業に触れている割合が高いほど、そしてオンライン授業の方がわかりやすいと思う学生ほど、今後もオンライン授業を続けたいという意見が多く見られました。オンライン授業は今後どの大学でも継続されていく可能性が高く、大学教育のスタンダードとして広がっていくと思われます。

これから少子高齢化と人口減少の時代となり、社会は劇的に変化していきます。このような社会においては、大学を卒業した後も学びを継続し、知識をアップデートしていくことが重要であると考えられます。これまで高等教育機関で学びなおすことは、社会人の方々には時間的な制約が大きいことがハードルとしてありましたが、オンライン活用により、学習のハードルが下がることで、今後さらに広がっていくことが予想されます。高等教育機関が学生だけではなく、オンラインコンテンツを通した学びなおしの場として今後役割を拡大していく可能性も、今回の調査から示唆されたと考えられます。